

文明版『三帖和讃』の書誌學的研究

淺井了宗

蓮如一代の教化に於て文明五年『正信偈』『三帖和讃』の開版は顯著な事實である。而して文明版『三帖和讃』の成立過程に關する問題は未だ解決されてゐない。右の問題に關して寛政十一年香月院深勵の『御草稿三帖和讃』がある。しかしこの外に『御自筆本』及びその斷簡や『顯智書寫本』『眞慧書寫本』の外、文明版系統のものとは云はれる本願寺系に所傳する古寫本、または佛光寺系の書寫本等を含めた廣い意味での「御草稿和讃」の書誌學的研究の必要を宮崎博士も指摘して居られる。かかる意味でまたその一端として『文明版』以前の⁽¹⁾本願寺系に所傳する古寫本によつて右の問題を考察しよう。

一

室町時代の本願寺系の古寫本として現存するもの、

一、永享八年八月、教俊の所望によつて蓮如（當時廿才）の書寫したものの、『正像末和讃』一帖、西本願寺藏、以下「永享八年本」と呼ぶ。

二、永享九年九月、吉藤專光寺へ存如の下附したものの、三帖、金澤專光寺藏、以下「永享九年本」と呼ぶ。

三、文安六年五月、加賀木越光德寺性乘に下附した蓮如（三十五才）の書寫本、三帖、西本願寺藏、以下「文安本」と呼ぶ。

四、享徳二年十一月、近江手原道場へ下附した蓮如（三十九才）の書寫本、『淨土和讃』『正像末和讃』の三十七首及び奥書、二帖、近江圓德寺藏、以下「享徳本」と呼ぶ。

五、長祿二年二月、教俊に下附した蓮如（四十四才）の書寫本、三帖、西本願寺藏、以下「長祿本」と呼ぶ。

その他東本願寺の存如書寫の一本、越後淨興寺の『淨土和讃』、能登羽咋本念寺の『淨土』『高僧』の二帖、能登上町本淨寺の一本等がある。以上の中、年代の明記された「永享八年本」、「永享九年本」、「文安本」、「享徳本」、「長祿本」等によつて「文明版」と對比し相互の異同を概括的に述べよう。

先づ「文明版」と上掲の諸本と對比して出入相違を列舉すると、構成に關して、(一)上掲諸本のいづれもが『淨土和讃』の始めの「讚阿彌陀佛偈和讃」の題號と「愚禿親鸞作」と云ふ撰號の前後順序が逆になつてゐる。また「永享九年本」のみ『正像末和讃』の「聖德太子和讃」の題號・撰號の順序が逆になつてゐる。(二)「永享九年本」のみ『淨土和讃』の卷頭二首和讃（冠頭讚）が書かれてゐないこと、「淨土和讃」大經讚第八首目以下第十・第十一・第十四の四首に頭註とも云ふべき「本願ノコ、ロ、第十八ノ選擇本願ナリ」以下「三十五ノ願ノコ、ロナリ」までの文が記載されてゐない。しかも述懷讚の前に「コノ和讃ヲヒクヘカラス」、善光寺和讃の前にも「コノ和讃モヒクヘカラス」と同筆で書かれ、また各帖に亘つてその最後に「三帖之内、コレミナ親鸞上人之御作也」と同筆で小さく書かれてゐる。(三)「永享八年本」、「永享九年本」には『正像末和讃』第三十一首目の終りに「御自筆淨土和讃下卷奥書被載此一首件本如此」と書かれてゐる。(四)「享徳本」、「長祿本」には冠頭讚に次ぐ

「讚阿彌陀佛偈曰」以下阿彌陀佛の尊號「十住毘婆娑論」の抄出が書かれてゐない。(四)「享徳本」には奥書に引續いて「清風寶樹ヲフクトキハ」の和讃が第三句まで書かれ而かも抹消してある。以上は構成に關する相違の主なるものである。

和讃の配置や讚數はほとんど「文明版」と變りはない。

次ぎに和讃本文の相違である。『正像末和讃』第七十九首目の「佛智不思議ヲウタカヒテ」の句を「文明版」以外の諸本はいづれも「佛智ノ不思議」となつてゐる。(これは『御草稿三帖和讃』も同じである。)

左訓に關しては、「文明版」と對比して可成り出入があり、また各本相互に相違がある。その主な一二の例を掲げると、『正像末和讃』第二十一首目の「度衆生心トイフコトハ」の句に「文明版」には「ヨロツノシュシヤウホトケニナサントナリ」を「永享九年本」以外の諸本は衆生を有情としてゐる。(而して衆生とすることは河州本と同じ)「永享九年本」は「ミタノホンクワンヲ ウミニタトヘマフスナリ」としてゐる。(これは恐らく第二十三首目の「彌陀ノ智願海水ニ」の左訓の誤寫と思はれる。)しかも「文明版」は上掲諸本より概して左訓が多く、また丁寧になつてゐる。その一例として「高僧和讃」第三十首目ノ第三句「汾州汾西秦陵ノ」左訓が諸本「永享八年本」、「享徳本」は缺)には施されてゐない。また終句「勝地ニ靈廟タタマウ」の左訓を諸本は「スクレタルトコロ」のみで終つてゐるのを「文明版」では「スクレタルトコロトムランノミハカナリ」としてゐる。(これ等の左訓は『御草稿三帖和讃』も「文明版」と同じ。)以上は「文明版」と諸本に共通する相違出入の一部を掲げたが、更に各本相互に可成の出入がある。

次ぎに假名遣ひであるが、これは各本相互に可成りの相違がある。例へば聲のエとエ、教のオとヲ、見のエとへ、變のワとハ、障のワとハ等であるがこれも各本それぞれ一定してゐない。これは「文明版」自體にも云ひ得る處で、かつて梯氏の研究にエ・エ・へ・オ・ヲ・ホ・ウ・フの混亂を掲げて假名遣ひの標本室・國語博物館と評してゐる程である。

二

以上文明版系統と云はれ、しかも「文明版」に最も近いと思はれる四・五本に就てその出入相違を抄出した。而し上掲の諸本を綜合して窺はれることは、存如の書寫した「永享九年本」や蓮如書寫の「永享八年本」に附記されてゐる如く「五濁惡世ノ有情ノ」和讃が「高僧和讃」の終りに書かれた親鸞自筆と稱する一本を傳へてゐたものと思はれるが、それは「反古裏書」に云ふ「建長六年云々」のものと同じであるか、或はまた「文明版」と同一の構成・讚數及び和讃の配置をなす今一本を傳へてゐたものか不明である。御自筆本と稱するものが本願寺系に現存しない。また「永享九年本」と「文安本」との間に構成に關して開きがある。「永享九年本」には冠頭讚が置かれてゐないのに十二年後の「文安本」にはそれが置かれてゐる。これは存如の指示によるものとも解し得る。或は又底本となるべきものがあつたか否か、それも不明である。また「文安本」には上掲の如く、大經讚の一部に頭註が施されて居りそれ以後「文明版」まで繼續して書かれてゐる。(以上の問題に一つの示唆を與へると思はれる「永享八年本」の『淨土和讃』は現存しない。)またこれ等の問題と關連して「享徳本」の奥書に次いで「清風寶樹ヲフクトキハ」の和讃を第三句まで書いて抹消してゐることである。何故

に蓮如が終りまで書かないで中途で抹消したのか、尙この外に「長祿本」には明らかに「讃阿彌陀佛偈曰」以下「十住毘婆娑論」の抄出等が書かれてゐないのか。（これは享徳本も同じ。）また諸本（永享八年本は缺）には撰號・題號の順序になつてゐるが何故「文明版」のみそれが逆になつてゐるか等々の問題がある。また左訓に關して概括的に「永享九年本」より「文安本」へ、更に「享徳本」、「長祿本」となるに従つて漸増しまた丁寧となり、「文明版」では餘程整備されてゐると思はれる。上述の『正像末和讃』の「度衆生心トイフコトハ」の左訓を「有情」とするよりは「衆生」の方がこの場合適切である。

此處で存如及び蓮如が書寫した上掲諸本のみでも如上の出入相違のあることは一體何を物語つてゐるかを考ふべきである。この問題はいかゝる四五本のみによつて容易に解決し得るものではない。唯問題の所在を提示するに止め、以下これと關連する本願寺に於ける三帖和讃の傳持に就て述べよう。

三

眞宗教團に於ける和讃傳持を考へる時、高田派をはじめ關東の門弟は和讃に對して積極的であつた。それは『末燈鈔』所收の高田慶信の消息に『淨土和讃』の一首が引用されてゐることや、『歎異抄』にも善導讃の一首善性本『御消息集』の最後にも二首が記載されてゐることによつても知られる。しかるにこれに對して本願寺では存覺が『破邪顯正抄』に和讃諷誦の事を探り上げてゐる。關東門弟の和讃に對する態度と本願寺系の探り上げ方と自から異なるものがある。かゝることが現存する聖教を通じても云ひ得ないだらうか。

高田派には宗祖自筆本と稱する一本をはじめ、『眞佛傳持本』（太子

和讃）、『顯智書寫本』等がある。それに比較して本願寺系では眞宗教誌學上重要な地位を占める覺存二師や乗專が多數の聖教を書寫してゐるにも拘らず三帖和讃は見當らない。本願寺系では高田派に比較して三帖和讃に對して比較的消極的であつたと思はれる。宮崎博士は本願寺系で三帖和讃に關心を持つに至つたのは存如の頃からであると指摘して居られるのは卓見である。しかも存如が三帖和讃に關心を持つに至つたのは存如の北陸教化と關連すると考へられる。

それは越前三門徒の祖と云はれる大町如導の『愚暗記返札』に當世一向念佛シテ在家ノ男女聚メツツ愚亮善信ト云流人ノ作タル和讃ヲウタヒ詠シテ同ジ音ニ念佛ヲ唱フル事、と記載してゐる。『愚暗記返札』は正和年中、長泉寺の別當と云はれる孤山隱士が當時の教界に現はれた風儀行儀に關して廿ヶ條に亘つて論難した『愚暗記』に返答したものである。而して『愚暗記』は北陸の念佛者に對して鋭い批判を數ヶ條に及んでなして居り、當時の北陸門徒の實狀の一端をよく示すものである。また元徳元年の奥書有する佛光寺了源の『算頭錄』にも、

聖人ハソノ稱ヘヤスカラシメムタメニ、和讃ヲツクリテ、諷誦ヲナサシメタマヘリ、マタ念佛ノモノウカラムトキハ和讃ヲ引聲シテ、五首マタ七首ヲモ諷誦セシメタマヘリト、先師明光ヨリウケタマハリキ云々、

と述べてゐるから、當時本願寺系以外の眞宗教團には可成り早くから和讃が諷誦されてゐたものと思はれる。殊に如導はもと三河圓善の系統を引く高田門徒であつた。従つて高田門徒内に於ける和讃諷誦の傾向がすでに北陸へ波及してゐたものと考へられる。緯如・巧如と繼承して北陸教線の擴張を志念した存如は當地に行はれる和讃

に關心を持つに至ったのは蓋し當然の事と考へられる。存如は『教行信證』から正信偈を抜き書きした程の人である。

四

更に聖教書寫に於ける存如と蓮如との關係及び文明開版の背景に就て述べよう。

眞宗教團に於て聖教を書寫し門弟に下附することは宗祖以來の傳統である。覺如・存覺が多數の聖教を書寫したことは顯著な事實である。また善如や緯如がこれを繼承したことは現存する聖教によつても知られる。しかもこれ等聖教の下附は巧如以後漸次その數を増じ、存如に至つて十六點が教へられる。聖教下附は門末の要請に應じたものであることは云ふまでもない。しかも蓮如は父存如に代つて聖教を書寫したと古くから傳へられてゐる。従つて蓮如の聖教書寫は父存如の指示によるものと思はれる。しかも存如の聖教下附は永享の末年から一時中止されてゐるのに對して、蓮如の聖教書寫はその頃から始まつてゐるのは右の事實を裏付けするものであらう。また蓮如が聖教書寫した期間前後約六十年中、書寫年月の明證あるもの三十四點中、嗣法時代の約二十年間に書寫したものの二十點を數へることが出来る。しかもその中最も回數の多いのは三帖和讃の四回（嗣法時代三回、繼職の翌年一回）である。存如もまた三帖和讃を二回書寫してゐる。三帖和讃に關心を持つたのは存如である。また聖教下附が門末の要請に應ずるものであり、且つ門末教化の一端を示唆するものとすれば、存如以後蓮如に至つて著しく多くなつて居り、殊に存如・蓮如が聖教書寫中、三帖和讃の下附回數が他の聖教に比較して最も多いことは門末の和讃に對する要請をそこに見出すことが出来ると共に、文明開版はかゝる要請に應じたものである。

る。勿論かゝる要請は和讃の諷誦に起因するが、また上掲古寫本が、地理的に北陸近江門末に下附されたことは吉崎に於て開版される背景を物語るものと云ひ得よう。

五

以上、本願寺系に所傳する三帖和讃の古寫本及「文明版」との間に相互に可成の開きのあることを述べると共に、本願寺に於ける和讃の傳持及び存如が三帖和讃に關心を持つに至つた所由を考定し、更に蓮如の文明五年「三帖和讃」開版の背景を述べたつもりである。蓮如の開版によつて三帖和讃に對する門末の要請は一應充されたと思はれるが、朝夕の勤行にまで採り入れられた正信偈三帖和讃の諷誦は益々盛んとなり現在に至つたものである。しかも存如によつて採り入れられた三帖和讃が蓮如に至つて文明開版となり、北陸門徒の要請を充したことは北陸に於ける眞宗教團の庶民的性格の一端を示唆するものといひ得る。

- 1 宮崎圓遯氏、『眞宗書誌學の研究』、本論文は上述の意味でこの書による處が多い。多屋頼俊氏、『和讃史の研究』
- 2 「文明版」と對比するのは「文明版」が最後の精撰されたものであると云ふ意味でなく、「文明版」成立の過程を知るための一方法として便宜上採り上げたまでである。
- 3 和讃の讚數は以下いづれも『眞宗聖教全書』による。
- 4 梯俊夫氏、『三帖和讃の國學的研究』
- 5 『末燈鈔』十四
- 6 『歎異抄』第十五章
- 7 『破邪顯正抄』中
- 8 宮崎圓遯氏論文、「室町時代に於ける正信偈の註疏に就て」（『宗學院論輯』第二十三號所收）